

第1回魅力ある県立学校づくりアドバイザー会議議事録

1. 日 時 平成27年7月30日(木) 10時～12時

2. 場 所 教育委員会室

3. 出席者

小倉康委員、白水始委員、菊地美代子委員、野原晃委員、秋庭美智子委員、永島宣幸委員、平野正美委員、岩崎利信委員、小玉清司委員、櫻庭比呂美委員、関口浩委員、坂庭千絵委員

4. 協 議 「今後の県立学校の教育の在り方について」

事務局	(資料4「今後の県立学校の教育の在り方について」のうち、「確かな学力の育成」について説明)
司会	本日議論していただく「今後の県立学校の在り方」についてのうち、「確かな学力の育成」について説明があった。三つの論点があるが、どこからでも結構なのでご意見をお願いしたい。
委員	県教育長が、これからは「学びの改革」であるとおっしゃった。このことについては平成元年から言われていることで、大きな改革だったが未だに教室の中にまで入って実現していないという実態がある。それがまた、ここにきて新しい学びとして「学びの改革」が提案されている。その理由と、今回の「学びの改革」がどのようなものなのかについてご教示いただきたい。そうでないと基礎・基本と主体的な学習の捉え方を間違ってしまう。今回アクティブ・ラーニングが先行してしまうと、基礎・基本はどうなっているのかということになる。県教育長も「基礎・基本とともに」とおっしゃっていたが、「ともに」が落ちて基礎・基本が忘れられてしまう危険性があるので委員にご教示いただきたい。
司会	高校だけでなく、小中高すべてについてということよろしいか。
委員	今回の改革は小中高が一体となって行うものなので、もちろんそうである。
委員	平成元年にも狙っていたが、改革の理念としては今回も同じである。指導法と

評価について、教育の世界も進んできたので今回こそできるのではないかと考え、今回の改革が提言されている。

どんなエピソードでこのことを伝えようかと思っていたが、一番簡単な例でいうと、次の学習指導要領をどうするかを話し合っている中教審の教育課程特別部会がある。そこでは、生きる力の育成を予算要求も含め、どのようにアクティブ・ラーニングと絡めて進めていくかという議論を行っている。これまで有識者がいろいろ意見を言うという形で10回行ってきたが、11回目で初めてグループ学習を取り入れた。4, 5人のグループになって相談して、概念地図などをつくり、電子的に傍聴者にも見えるようにした。まとまった意見を発表していくという進め方をして、自分たちのアクティブ・ラーニングの理念を示したという初めての試みだった。

コメントが二つあり、一つは意欲的な試みだったので非常によかった。10回までは有識者が自分の意見をおっしゃるのだがそれをまとめてどういう方向にしていくかが定まらないものが、グループごとだと意見が融合されてまとまりがあるものになり良かった。しかし、もう一つは次の段階においてグループでまとめた意見をどこに持っていくかというところが難しく、そこからの盛り上がりには欠けた印象がある。

子供たち一人一人が主体的に伸びていくという県教育長がおっしゃるような学びを実現するためには、その部分まで丁寧に方法を考えて、授業でどのように進めればよいかについて見取る先生の力量と、その先生を支える体制づくりについてまとめて考えなければならないといけないということを教えてくれた。理念として10年、20年前にやりたかったことを、今ようやく指導法と評価法を込みにして考えようと試みている。

委員

国際的な流れとして、子供たちに何を身につけさせるかということについてPISA調査の中では色濃く反映している。それを議論するのに各国の専門家が集まり、キーコンピテンシーという資質・能力を見極めるための会議を90年代の終わりにして、2000年代の初めにはそれを公表してキーコンピテンシーを定義している。キーコンピテンシーを中心に、各国でどのような資質・能力が15歳段階の子供たちに身につけているかを調査するのがPISA調査である。

キーコンピテンシーを議論する前提にあるのが、この時代を充実して生きていくために必要な資質・能力は何なのかという論点である。その論点の中で、結論的に一言で言うと「様々なニーズに応えるための資質・能力」という定義がされている。様々なニーズに応えるというところが、今までややもすると特定の知識・技能を習得して、それを繰り返し使用することによって活躍できた時代であったが、今はそうではないという認識である。県教育長がおっしゃったように今

存在する職業が将来的にあるとは限らない。そうなったときに様々なニーズで仕事にどのようにかかわっていけるか、そこで活躍できるかが大切である。そう考えると特定分野に特有の知識・技能をどう扱うのかは不可欠な要素であるが、ただそれだけでは仕事の内容が変わったときに対応できないので、汎用的に活用できる資質・能力が重要になっている。

基盤的な知識・技能と汎用的な意味での能力、これは生きる力の中の確かな学力も大事なのだが、基礎的・基本的な知識・技能とそれを活用するための思考力・判断力といった能力観がキーコンピテンシーで問われている。それにプラスして、人間関係形成のための協調性とかコミュニケーション能力といった人間関係の能力、さらには自分自身で判断して物事に取り組んでいく自律性、主体性、リーダーシップといった自身が判断する力、この大きく3領域を様々なニーズに応える能力として子供たちを育てることで一致した。さらに、特定分野に必要な専門的な知識を学校教育において身につけさせるということ。

生きる力は、日本の目標として90年代中盤には中教審で議論されていてどう実現するか試行錯誤を重ねながら20年の時間が過ぎた。その中で、さらに豊かな心と健やかな体も含めて総合的な学力として取り組んでいるので、国際的な目標とそんなにずれているとは思わない。ただ御指摘があるように、学校現場ではそれが変わらないということが本質的な課題である。

大学生を見ていると高校での勉強は座学で面白くない、興味がないという感想を持っている。なぜ高校が座学中心の受け身な学習になっているのか、なぜ未だに受け取るというタイプの学習を中心に行っているかということに対して、推測だが教えている我々の世代が受けてきた60年代70年代の教育がそうだったことがある。学ぶ内容や方法が示されて、正確迅速に課題をこなせばいい成績が取れたという教育を受けている。その教育の再生が高校現場で中心となっている。

高校の先生方の意識の中では、こんなにたくさんの内容をこの時間で主体性を活かして教えていくというのは無理であるというせめぎ合いはあると思う。しかし、授業のスタイルそのものが、教員が受けてきた中高での授業の姿を再生しているという面が強いため、今の時代に必要な授業を具体的に示してその良さを納得していくプロセスが必要である。生きる力については、理念的なところでは議論し間違っていない。それが授業において具体像になってなかなか見えてこないことが学校現場の大きな課題である。

司会

ありがとうございました。座学中心の学習が課題であり、育成すべき資質・能力を踏まえた学習についての視点が必要だという話があった。協調学習について県教育長と事務局から、埼玉県でも徐々にそういった取組を進めているという話

<p>委員</p>	<p>があったが、その辺を高校現場にいる先生からお願いしたい。</p> <p>県教育長からも話があったが、学習指導要領の改訂、高大接続改革は国の大きな変革であり、現場としてはまだ見えにくいところもある。委員からあったように、平成元年にも同じようなチャレンジを行いつつも、知識・技能との関連もあり、改善されたとは言えない。結局、委員のおっしゃるような一つの原因としては、教える側の技能が高まっていないことがある。その理由は、教員の意識の問題もあるかもしれないが、本人が受けてきた教育を単純に再生しているという側面もあるかもしれない。また、それ以上に平成元年来のそういった動きが成果を上げなかったのは、中学校であれば高校入試があり、高校であれば大学入試があり、そこに向けてアクティブ・ラーニングのような授業をやっても実際には定期考査が知識・技能中心のものにならざるを得ないという状況があった。</p> <p>今回の大学接続システム会議には、県教育長も参加されているが、7月に4回目の中間発表が公表された。予定通り今の中学1年生が高校2年になる平成31年に高校生基礎学力テストが開始される。そして翌年からセンター試験に代わって、新たに大学入学希望者学力評価テストが開始され、さらに大学個別入試も始まり、聞いているところでは、知識・技能を基盤としながらも、思考・判断・表現力、それに加えて学び続けるような意欲の学習の3要素をしっかりと問うような傾向の問題が確立されるということである。</p> <p>これまで学校現場の様々な授業の中で、テーマ学習とか協調学習とかいろいろ手法を取ったとしても、目の前には受験があり、学力評価テストは知識中心に定期考査等を作らざるを得なかった。それが今度は学力の3要素を身につけさせて、その学力を大学入試に向けて強化していく。そうなれば学校も従来通りの知識だけでは対応できなくなる。さらには、学習指導要領にも平成34年から高校には学年進行で入ってくる。そこにはアクティブ・ラーニングとか評価の改善についても規定されるだろう。今回ばかりは学校現場としても、これまでのように授業は授業、しかし大学入試に向けた取組についてはそれはそれということができないだろう。その接続をどうするのかということが、今学校現場の最大の悩みである。</p>
<p>委員</p>	<p>私は東大のコレフの研究員をやったことがある。今は高校で美術を教えているが、その中でも協調学習を取り入れて行っている。その前は普通科の教育努力校にいたが、そこでも取り入れうまくいった。昨日西部地区の教務主任会に参加し、アクティブ・ラーニングの話もしてきた。アクティブ・ラーニングの捉え方として、「アクティブ・ラーニング＝ジグソー法」とは限らないと思う。アクティブ・ラーニングというと膨大な資料を用意して、その準備に時間をかけて授業すると</p>

いうイメージがあるが、アクティブ・ラーニングという言葉はアクションであり、脳の中の内発的な誘導さえできればそれはアクティブ・ラーニングだと文科省も考えていると思う。ジグソー法をやりなさいということではない。

高校のニーズという話だが、今はお手本がない時代である。これまでのように経済上昇期にやってきた教育と、私も偏差値による競争の時代だったが、ちょうどそれが折れ曲がり、最終的には2050年には人口が1億人を切り、2100年には6千万人くらい、つまり明治時代位の人口まで減ってしまう。つまりお手本がない、やればやっただけ報われない時代である。ではどうするか。そうなるにニーズと言うよりウォンツである。ウォンツというのは成功するかわからない。まるっきり未知の世界。そこで挑戦しないと日本はなくなってしまう。そういった危機感が現場の教員にもない。何とかなるだろうと考えている教員が多い。県がつぶれる、国がつぶれるという危機感がない。

埼玉県はリーダーシップを発揮して、協調学習、ジグソー法を全国に広めようとして取り組んでいる。ものづくりの国である日本はものを作らないとつぶれてしまう国である。高校現場では大学に入れてナンボだということに主眼が置かれがちだが、就職する生徒もたくさんいる。高校を出て就職する生徒に対するケアなどの論点が、こういった会議では抜けがちである。逆に今後は、そういった生徒を稼げる人間にしていく方策を戦略的にみんなで考えていく必要があると思っている。高校は中学校と違って未だに学力別であるので、学校ごとに考えていることが全く違う。どちらかというと半分くらいの高校は、いかに基礎的な内容を教えるかに苦勞している。こういった改革になると大学入試で高大連携についての話になる。今後は人口が減っていくので、これまで以上に人と人がつながって協働することが求められる。これからは方法論でなく目的論で、どのようにこの国をものづくりの国として作っていくかまで掘り下げて考えないといけない。離職率が高く、ひきこもりが70万人いて人口が減ったら日本はつぶれてしまう。そういった時代を迎え、どのような人材を育てるのが注視される場所だと思っている。

委員

冒頭で確認したいのだが、今回の会議の表題は学校でなく公立学校でもなく、魅力ある県立学校づくりというものである。魅力ある県立学校づくりについて生徒数減少ということが一つ、生産年齢人口が減っていくということが一つ、また経費が膨大になっているということが一つ、こういったことがあることが前提で魅力ある県立学校づくりをしていかなければならないという説明があった。魅力ある県立学校づくりは、何にとっても魅力ある学校づくりなのかを確認しておく必要があると思う。

学校を選ぶに当たってアクティブ・ラーニングなどの興味ある力がつきそうな

	<p>授業をしているぞということで、中学生にとって魅力ある県立学校づくりなのか、それとも経費について高い税負担を続ける県民のニーズに合った県民にとっての魅力ある県立学校づくりなのか、それとも産業構造が大変化する中で、グローバル社会の中で社会、ビジネス界にとって県立学校が魅力ある学校づくりをしていくのか、いったい誰にとって何にとっての魅力ある県立学校づくりなのかをはっきりさせておきたいと思う。アクティブ・ラーニングの話になっているが、冒頭からその話だけに入ってしまうとちょっと焦点がぼける気がするので、最初にその点を確認しておけば話の方向性を間違えないと思う。また、この会議を2回行って最終的にその結果をどう波及させるつもりなのか、確認させてほしい。</p>
司会	<p>誰にとっての魅力かというご質問だが、第一義的には生徒である。これから高校に通う中学生や現在在籍している高校生である。生徒にとって魅力ある学校を作れば、それが社会や企業、地域にとっても魅力ある学校になるのではないかと考えている。メインは生徒だが、魅力ある県立学校は社会にとってもいいものだろうから特定するものではないと考えている。事務局で補足はあるか。</p>
事務局	<p>基本的には今の話の通りである。最初の周辺状況のところで申し上げたかったのは、いろいろな対象生徒がいる中で魅力ある学校を作っていかなければならない。ただ、無条件に何でもできるわけではない。生徒が減ってくる、それに投資できる経費は限られてくる状況を踏まえて、実現可能な方策を前向きに考えていかななくてはいけないという説明をさせていただいた。目指すべきものは、2回に分けて各論、総論で御意見を頂く予定だが、県教育長も申し上げていたように、まずは県教育委員会としてアドバイザーの方々に幅広くご意見を頂いたうえで、魅力ある県立学校づくりというテーマでどのように取り組んでいくべきか、今とは違った形のどういう仕組みができるのかというようなことを検討して行って、何らかの成果や結果を出すことが今の一番の目標である。明確に何をということではないが、現状と課題をしっかりと捉えて、ご提言も頂きながら、改めていくべきところは改めていく、あるいは新しい取り組みを進めていく。県教育委員会として、新しい仕組みづくりについて考え方をまとめたいというのが現時点の目標である。また、今後県教育委員会としてアドバイザー会議の御意見も踏まえて何らかの成果を出したいと現時点では思っている。</p>
委員	<p>「21世紀いきいきハイスクール構想」の期間中に実施された再編整備とは違うということか。</p>
事務局	<p>これまでも再編整備計画というのもあったが、今回のテーマはあくまでも魅力</p>

	<p>ある県立学校づくりである。ただ魅力ある県立学校づくりを進めていく上では、先ほど申し上げた課題もあるので、そういう意味では今の状態でやっていくのがいいのか、新しいことを考えていくのがいいのか、あるいは現状を見直して改めないといけないのかということもテーマとして当然入ってくると思う。現時点で何かがあるということはないが、検討していく中でいろいろな形が出てくる可能性がある。</p>
委員	<p>違和感を感じたのは、アクティブ・ラーニングという手法のところの話が進んでいったことが、会議の冒頭としてどうなのかということではないかと思う。魅力ある県立学校づくりに向けて、何をどのように実現していくか、最終的にどういったシステムにしていくのかという非常に大きな流れがあると思うが、そういった中で、冒頭議論すべきところはどこなのかということが多少見えにくいという印象がある。</p>
事務局	<p>その点は、2回の検討テーマについて冒頭に説明させていただいたが、本日は第1回ということで、県立学校全体にかかわる総論的な「教育の在り方」というテーマにした。置かれている状況は説明した通りだが、教育方法も含めて幅広く議論していただくために、柱立てを大きく分けて二つ、小項目として七つとした。今回いただいた意見も踏まえて、2回目の会議で各学校やいろいろなタイプの学校をどう見直していくかということに七つの切り口はつながっていくものと考えている。まず、今日は入口のところで、大項目についてこうあるべきというお話を頂いたうえで、それを2回目の各学校、各タイプの学校をどうしていくかにつなげていきたいと考えているのでご理解いただきたい。</p>
司会	<p>いろいろ現場から貴重な御意見を頂いたが、ここでは三つの論点を用意している。これまでの話にも含まれていたかもしれないが、グローバル化に対応する教育や科学技術教育について何かご意見・ご提言等あればお願いしたい。</p>
委員	<p>グローバル化や科学技術という分野は、社会を牽引していく人材という意味で大きな二つの方向性である。これは、日本だけでなくどの国もこの二つの方向性を重視して学校教育を行ってきた。</p> <p>グローバル化が島国である日本においては育ちにくい環境であったというのは事実である。今も小中高でグローバルにコミュニケーションをとる機会は英語教育という領域を除いてはほとんどない。また、身につけた能力を活用する場がほとんどない。しかし確実に社会は変わってきているので、望む望まないにかかわらずグローバルに対応する場面が訪れるので、成長していく中ですべての子供</p>

がグローバル化を経験できるような状況を作ることが大切である。その中で、社会を牽引していくようなあるいはビジネスの場で率先して行動できる人材が必要なので、高校教育や専門教育において特定の学校がそういった人材を育てていくことが大切である。

科学技術についても同じことが言えて、グローバル化している状況である。その中で世界を牽引していく人材育成ということで、埼玉県には私学を含めて10校のスーパーサイエンスハイスクールがあるし理数科を有する高校もある。高校で科学教育を受けて大学、さらにその先に進んで将来的には研究開発の分野で世界をリードしていく、そういった方向の教育が確保されないといけない。今までにも取り組まれてきたことだと思うがこれからも重要な方向性である。スーパーサイエンスハイスクールについては国の指定事業なので、永遠に続くとは限らない。その中で魅力ある学校づくりについては、安定した目標をもとに設置されている学校の中で、人材をどう育成していくのかということについて議論すべきだと思う。

また、グローバル化社会において牽引していく人材についても同様に学校の中でどのように育成していくかという議論が必要である。国では一つの例として、IB（インターナショナルバカロレア）に対応した学校を増やしていこうとしている。IBの資格と言うのは、グローバル人材の素養や力量として保証された世界で認められている資格なので、そのような教育を受ける機会が県立学校の中でも必要かどうかを議論していくべきだと思う。

委員

これまでの話はごもっともだと思うが、私の立場だと違和感がある。成績上位の子を育てる、つまり中学から高校、高校から大学、その接続をどうするかの話ばかりで、簡単に言うと普通科のことについての話をしている。しかも優秀な子についてである。しかし、現実的にはいろいろな学校があるということを頭の隅において議論してほしい。まるで中教審の会議のようだ。グローバル化も科学技術を牽引することも大事だが、生産する人間も必要である。そういったところを補っているのが工業高校などの生徒であり、産業構造のすべての分野に対応する人材を育成していかないといけない。

その中で課題としては、今の仕事があるとは限らないということを教員は意識しているが、生徒が意識しているとは思えない。社会がこう変わるからこういった能力を身につけようなどという考えはない。自分の将来構想を先送りしているだけなので、自分はこういう職業に就きたい、このように頑張りたいという意識を持たせたい。キャリア教育は普通科高校でしっかり行われているか。数でいえば、全国平均で普通科は70%、専門高校は18.9%である。統廃合でも無くなってきたのは専門高校で、普通科高校は増えている。

	<p>埼玉には地場産業がたくさんあり、そういうところが大卒でないと採らないということはない。どこの高校がそのような地場産業を支えるのかという観点も必要だ。このような話は、今日話し合うレベルとしては合わないと考える方もいるかもしれないが、すべてのレベルの生徒のことを考えながら議論を進めたい。冒頭言いたいのはそのような学校があり、また必要であり、そういった学校の魅力づくりはどうかをしっかりと考えて議論を進めてもらいたいということである。</p>
司会	<p>この会議が大学進学だけを捉えたものではないことをご理解いただきたい。</p>
委員	<p>分かっているが、そういった雰囲気を感じたので申し上げた。</p>
委員	<p>中小企業の経営者の立場から申し上げますと、一人一人が自分を価値ある人間なんだと分かることが重要であるということである。生徒の保護者と話す機会も多いが、十代の生徒は偏差値教育で育っているなのでその価値観で考えることが多い。企業のトップの方々もそういう価値観をもっている。</p> <p>しかし、新しい魅力とは何か、その定義を煮詰めて新しい価値観を作ってほしい。それを企業にも家庭にも周知するために、学校が発信源となってほしい。魅力ある学校はここにあるということを知らせていく。その魅力とは、どんなところに生まれても、どんな能力を持っていても一人一人が輝いていけるように、価値ある存在だと認めてあげられる教育ができることだと思う。そのためには、そういったことを先生方にも熟知していただくことが必要である。そのためには先生方へのレクチャーが必要だと思う。</p>
委員	<p>全国高等学校校長協会や全国普通科校長会などでは、全国規模で地域の代表が集まりいろいろなことを話し合っている。首都圏を離れた地域は非常に危機意識が高い。どこの学校の取組も人口減少に直面していて、学校の統廃合や専門学科を中心として学科再編が行われている。学科再編も従来の学科を合体させたり、地域産業を支えるために直結するような学科に組み替えたりしている。</p> <p>先ほどの説明では埼玉県の人人口も減るとあったが、首都圏ではまだそれほどではない。全国の会議においては、例えば高知県の校長先生の話は危機的な話ばかりである。そういった中で、学校として生き残りを図っていく。そのキーワードは大学進学もそうだが、地域の産業にいかに関わりついて高校生を育成していくかである。そのために、時には統廃合もあるし学科の再編もある。今の時代というよりはこれからの時代に合致する産業教育に切り替えていく、そういう流れを非常に強く感じている。</p>

委員	<p>国際的に視野を広げ世界に挑戦する意欲を高めるためには、というテーマが与えられたが、基本的に勉強や学習が人を自由にしたたり幸せにしたりする。自分にとってプラスになる。自分が自由になって幸せになり、少しの余った幸せと自由を人に与えれば世の中は良い方向に向かう。つまり学習が世の中を良い方向に向かわせる。この二つのことは当たり前のことだが、生徒に教え込まれていないような気がする。このことは時代に関係なく大テーマである。これが現在において常識になっていないのが問題である。この二つのことが生徒に教え込まれれば、生徒は必然的に学び続けたいといけないう意識になる。学び続けなくてはならないということは、グローバル化社会に対応するということである。ただ、それを教える学校は良い学校だが、中学生、高校生にとって魅力ある県立学校づくりになるのかというとイコールではない。教育内容を充実させることは良い県立学校づくりだが、魅力ある県立学校づくりかと言うとちょっと難しい。</p>
委員	<p>娘が2人いて、上の娘は私立の中高一貫校に通って、下の娘は県立高校に通っている。2人を比較してみると上の子は6年かけて学んだが、下の子は高校受験、大学受験を乗り越えようと頑張ったので「勉強＝偏差値」と考えている。上の子は高校受験もなく大学の付属だったので希望をすれば大学に上がった。ゆとりがあり年間に何百冊も本を読み、レポートや論文の提出も中学時代からあり大学に行ってもレポート提出があっても困らなかった。公立高校から来た友達は、自由研究などはやってきているが、レポート提出などをやってきていないので非常に困っていた。偏差値は3年と3年で勉強してきている公立高校から来た生徒の方が高いかもしれないが、6年間で余裕を持って学習してきた子の方が、トータルで見ると人間関係なども含めて良いかもしれない。</p> <p>また、私立と公立を選ぶ際、学費の問題もあるが、私立に進学しても埼玉県は補助制度があり、また公立で予備校も考えるとどちらに進学してもほとんど変わらない。そうなるとう願で私立受験という友人も多かった。受験の際にいろいろな高校を見学するが、やはり施設設備が良く、また先生方の授業内容だとか熱意などに触れると私立に行きたくなくなってしまふ。埼玉県の場合、私立高校に流れてしまうことが多いのではないかと思う。公立の先生方も一生懸命面倒を見てくれていることは下の娘をみても良く分かるが、実際に行ってみないと分からないところである。そうなるとう施設など目で見ると判断する家庭がある。下の娘の学校も老朽化している部分があり、直してほしいところもあるがいろいろな決まりがあるらしくすぐに実現することは難しいようだ。PTA会費でエアコンを入れようとしたらそれも決まりがあつて駄目だと言われた。先週はPTAの会合をエアコンのない部屋でやったが、半分以上の保護者が参加してくれた。</p>

	<p>公立の先生方にはすごく感謝しているが、それは短期間では分からない。施設面が良くなればもっと公立の評価、魅力が上がっていくと思う。魅力は施設だけではないが、先生方の熱意は中に入ってみないとわからない。見える部分と見えない部分という視点でいうと、見える部分の施設の充実が予算が厳しいことは承知しているが、魅力づくりにとっては大切なものだと思う。</p>
--	---

司会	<p>今の御意見に対してもいろいろ御意見があると思う。私立も公立も良いところはあり、生徒や保護者が学校に何を求めるかでも印象は違ってくる。ただ施設のことについては県立学校としても考えていかななくてはならない。</p> <p>それでは、次（2枚目）の論点に移りたい。</p>
委員	<p>（資料4「今後の県立学校の教育の在り方について」のうち、「社会的に自立する力の育成」について説明）</p>
委員	<p>最初の論点と今回の論点は繋がっていると思う。先程のグローバル人材の育成や科学技術教育のところで、それは一部の生徒が対象ではないか、という話もあったが、基本的には中学生が自分の将来像の意識がしっかりと身についており、それに対応した選択肢があるというのが理想である。つまり中学生の希望に対して全てのメニューが揃っている、ということである。</p> <p>今回の論点は、中学生・高校生が、自分が社会に出て活躍する上で意識とか必要とされているという認識をどう育てるか、それに伴う能力をいかに身につけさせるか、というところの議論だと思う。</p> <p>魅力ある学校づくりとは、それに対応した学校があるかということだろう。各学校がそれぞれの特色を発信できるような状況に自己改善・改革をしていって、その特色に合わせて、その特色を見ながら、まずは中学生が自分に合った学校を選んでいく、という状況が大事である。</p> <p>次に、入った学校でしっかりと知識や能力を身につけることができるという状況を、各学校の教育プログラムの中で具現化していくということである。</p> <p>そうした学校の中身の問題、更には卒業した後にその特色を生かして社会の中で活躍していく、ということに繋げていく。それが全て繋がると、この学校に行くところという活躍の場が待っている、という期待を持ちながら学校に通うことができ、充実感・達成感を得て社会で活躍していくという、一番望ましい状況が出来上がる。</p> <p>そう考えると、全てのスペクトル、いろいろな色の学校が必要であり、その中でグローバル社会で活躍する人材、科学技術で活躍する人材、地域社会で活躍する人材、特定の産業分野でスペシャリストとして活躍する人材、芸術やスポーツ</p>

	<p>の分野で活躍する人材などを育てていけばよい。</p> <p>将来どういう分野で活躍するかという幅に対して、高校が最適化されたプログラムでうちに来てください、という状況を作っていくことが魅力的な学校づくりになるのではないか。</p> <p>委員 現在は、全ての高校の生徒が、全体の8割のことで満足してしまう、というのが実態ではないか。進学校の生徒も、進学はするが、なぜ大学に行くのかというところまで教員共々突き詰められていないのではないか。今、自分は専門学科に勤務しているが、そこでもそう、おそらく工業高校などの専門高校でもそうであろう。全ての生徒が、あらゆる事で8割達成すると満足してしまう。</p> <p>その意識が改善できる学校ができれば、全国に先駆けて、魅力ある学校づくりが実現できるのではないか。</p> <p>ただし、これは教員にその意識がないとできない。残りの2割が実は一番大切であり、そこを突き詰めていくように生徒を仕向けていかななくてはならない。今後は、待っていたら仕事がない時代となるので、そうした状況を切り開ける能力につながる。</p> <p>キーワードは汎用性である。例えば、美術における汎用性はこんなところで社会で活用できる、などのように、各教科の汎用性を伝えていくことが大切である。</p> <p>また耐力（耐える力）も必要である。そういったことも教科の中で教えていかないといけない。つまり高校の勉強を高校だけで完結すると思わず、社会と直結させないといけない。</p> <p>大学に進学する生徒であっても必ず就職するので、大学へ行って何を勉強したいのかという核の部分をしっかり教育していることが大切で、それを実践している県が埼玉県だと言いたい。それが実現できれば論点がすべてクリアできる。</p> <p>言いたいことは、8割で満足している生徒に対して、教員がそれで良いとしていることが問題であるということである。</p>
委員	<p>中学校の立場から話をさせていただくが、今は中学生にとって将来像を描きにくい時代である。先程も話があったが、20年後には今ある職業の半分くらいは無いという知識ぐらひは中学生も持っているが、どういう職業に就けばよいかまでは考えていない。</p> <p>中学生が高校に進学する時に、選ぶ元になるのは憧れの部分が多い。憧れというのは学力の部分でもあるし、見学に行った時の先輩たちの活動の様子という面もある。</p> <p>今は県立高校も私立高校も校長先生を筆頭に努力をされているので、特に地域と協働した教育はどこの高校も進めてられている。私の勤務地は小学校が三つ、</p>

中学校が一つ、県立高校が一つの小さな町だが、その県立高校は、小学校3校の田植えに参加してくれている。収穫したものを秋になると自分たちで稲刈りを一緒に食べたりしている。中学校では吹奏楽部や運動部と一緒に活動してもらっている。また、高校の先生が中学校に来て授業をしてくれたりもする。

中学生も色々な高校に行く中で、生徒の活動を見てこういう学校に入りたい、こういう先輩と一緒に活動したいという憧れの部分が多い。

偏差値だけで選んでいくと、県立にも私立にも同じようなレベルの学校はたくさんあるので、本校の卒業生でも、そういう選び方をして高校に入学し、一年持たずに辞めてしまう生徒がいた。

少し、最初の論点に戻るが、アクティブ・ラーニングなど、新しいものが出ているが、中学校現場からすると、中学校には学力レベルの違う生徒がいるので、先生方をお願いしているのは、とにかく「楽しい授業」をしてくれということである。その中で知識が身についていくようにしていけばよい。アクティブ・ラーニングも授業の組み立ての比率を変えるくらいで良いと思う。全部変えることは無理なので、比率を変える中でラーニングピラミッドの定着率などを考慮しながら工夫していけばよい。

教師はまじめな人が多いので、新しい言葉（指導方法）が出てくると、何とか取り入れようとするが、消化できない部分がある。

中学校の場合、コミュニケーション能力の育成ということで、既にいくつかの取組が例示されている。今回はアクティブ・ラーニングの導入ということで、高等学校での協調学習、ICTの活用等の例が紹介されたが、中学校では高校以上に推進するのが難しい部分もあるので、上手く活用していかなければならない。

いずれにせよ、中学生が憧れを持てる、入学して一緒にやってみたいと思える県立学校を作っていただきたい。

委員

先ほどの委員の言葉に乗っかるような形でコメントさせていただくが、8割を10割にそしてさらに12割にということは学びのゴールをどこにするかということである。

先生の決めた学びのゴールに到達したら終わりという授業を繰り返したり、大学入試があるから高校で勉強するというように後ろ向きに逆算したりして学ぶのではない。

先生は今日ここまで来てもらいたい、そのゴールに到達したらその先に自分で新しい問題を見つけるということをみんなが取り組めたら良いのではないか。

設定したゴールに到達した後で、私は新しい問題を作っちゃったという副作用を生むような指導を教科の中でしっかりとやっていくことが、魅力ある学校づくりの大きな柱になる。

私も愛知から東京に引っ越して来たが、埼玉を選んだのは、中3の子供がいたこともあり、埼玉で学び方としてジグソー法が導入されていたことに魅力を感じたからである。学び方がひとつの手掛かりであった。

学び方はもちろんジグソー法だけではないが、ジグソー法を通して知ってもらいたいのは、学びのゴールは子供たちが作っていけるということである。授業で学んだ後に、こんな問題を解きたい、こんな物を作りたいというところに繋げてもらいたい。そのサポートをして、この学び方を埼玉の売りとしていきたい。

今の日本の教育で非常にもったいないと思うことは、田植えなど、特別活動や行事は充実しており子供たちは前向きに楽しくゴールを設定するのだが、それが教科と結び付いていかない。それを結び付けるアイデアを埼玉から発信してけると良いと思う。

例えば、理科で学んだ知識を、どうやって教科外の田植えに使っているかなどを考えていければ良い。教科で教わった知識をこう使いたい、こういったことをやりたいということをリストアップして総合学習の時間でやるというサイクルができるの良いのではないか。

また、学校にはよく「粘り強さ」などの目標が書いてある「石碑」があるが、それを算数の授業で意識してやっているかということ、関係なくやっていることが多い。例えば大学入試の推薦時に、『本校の目標は石碑にあるように「粘り強さ」なので、それに関してはこの生徒をおいて他にいません。』ということ、自信を持って言えるように、「粘り強さ」をそれぞれの授業に落とし込んだらどういう振る舞いになるのか、ということを考えながら、学びを総合的なものにしていけると良いと思う。それを是非、埼玉発で提案して欲しい。

そう考えると事務局にお願いしたいのは、自助・共助・公助という学びの三つのキーワードを、生徒のレベルまで落とし込んで分かりやすく解説して欲しいということだ。

自助・共助は授業の学び方を支えるものであり、これを授業で繰り返していくと、例えばグローバル化を進めていく中で、お互いが好きなことを言いあって、違う意見に対した時に、科学的な証拠を元に考える力が養われる。自助・共助の学び方の一つとしてジグソー法を利用して、自分の意見をきちんと言いながらも他人の意見も聞いて意見を変えることができる、というのを埼玉の学び方の常識として欲しい。

公助のところだが、子供たちが課題を思いついたので企業と連携しようと思っても体制が整っていないと子供たちにチャンスが生まれにくい。現在も産業教育の仕組み作りが続いていると思うが、公助の工夫を是非魅力ある県立学校づくりの看板として押し出して欲しい。具体的には学校と企業の連携状況を明確にして、この企業のこういった問題がこの学校で取り組めるかもしれない、ということが

委員	<p>見ると、次にそれを経験した子が企業に入った時に、今度は企業の側として後輩に同じような体験をさせてあげるような体制に繋がっていく。そうすれば公助への期待が高まるのではないか。</p> <p>NO. 5の資料に特別支援学校の就労状況のグラフがあるが、生徒数は確実に増えてきている。増えているのは知的障害の部分である。盲やろう学校の生徒数は変わっていない。知的障害の生徒が特別支援学校に入るという率が年々増えている。参考資料としてまとめた中にも、知的障害の特別支援学校21校とあるが、そのうち2校は軽度の知的障害のみの生徒を集めた企業就労100%を目指した高等学園である。知的障害の高等部においては、特に就労に力を入れている。</p> <p>特別支援教育的な配慮は一般の高校においても有効である。発達障害で知的障害を伴わないという生徒は、学力的に高い学校をはじめ様々な学校に在籍している。そういった生徒に対しては、板書の仕方とか授業内容の提示の仕方などのわずかな配慮で、学びやすくなることがある。そうしたことは重要な点であり、全ての県立学校で特別支援教育的な配慮は必要ではないかと考えている。</p> <p>平成28年4月から障害者差別解消法が施行されることになっている。この法律の二つの大きな柱は、不当な差別的取扱い、合理的配慮の不提供が禁止されたことである。人的にも施設的にも可能であるならば障害のある人が不利を被ることがないような環境を私たちが作っていかないといけない。特別支援学校以外でも障害のある方たちに対する配慮するという視点を持って進めていただきたい。</p>
委員	<p>キャリア教育などの議論になると、専門高校が主ではないかという観点になってしまう。また、特別支援教育は特別支援学校に任せればという話なる。そうではなくて県立学校という全体でやっていくべきだろう。ただし、どのくらいの比率でやるかは各校種によって変わって良いと思う。職業に直結したキャリア教育が専門高校中心になるのは良い。専門高校がキャリア教育を「10」やったからと言って、進学校がキャリア教育を「10」やる必要はない。それでは受験勉強ができなくなる。ただし「0」ではまずいと思う。</p> <p>キャリア教育もインクルーシブ教育も県全体でやるという姿勢が大切である。実際は厳しいかもしれないが、たとえばインターンシップを浦和高校でやることもいいのではないかと。いつかは働くわけだからそういった試みが埼玉であってもいいのではないかと。</p>
委員	<p>先程、委員から高校選びは憧れの部分が大きいという話があった。また、別の委員から高校の特色化を中学生が見極めて接続するという話もあった。そういっ</p>

た部分はまだまだ開発の余地はあると思う。それが高校とのミスマッチで中退するということの防止に繋がっていくと思う。

インターンシップや起業家教育（アントレプレナーシップ）などは主に専門高校で行っている。しかし起業家教育などは、県を代表するような伝統校あたりで行って、それが大学に入学してからも結びついていくものではないかと思う。

中学生が高校を選ぶ時と違って、高校生が進路を考えると、むしろ憧れというより、身近なロールモデルを示すことが多いのではないか。自分の学校のOBやOGで活躍している人を示すということだ。委員から、浦和高校でインターンシップを、という発言もあったが、OBの心臓外科医である天野先生のところ、医学を目指す生徒が3日間張りつきで研修している。浦和一女でもそうしたことを始めている。県の事業指定がない学校では、学校独自で様々なところと連携して、ロールモデルを示していかないといけない。

中高の連携については、例えば、キャリア教育、18歳以上の選挙権の問題、アクティブ・ラーニング、学力3要素の2番目3番目（②課題解決を図る思考力、判断力、表現力 ③主体的に学習に取り組む態度）をさらに伸ばしながら大学入学に結び付けていくことなど、高校の3年間だけで指導するのは無理である。魅力ある県立高校をつくっていくためには、中学校とも連携を強化しながら進めていかなくてはならない。

高校の場合は、来年の参議院選挙で選挙権のある生徒とない生徒が教室に混在することになる。高校入学後にそこまで育てられるのかという不安があり、やはり小中高と段階を踏んで主権者教育をしていかないといけないと思っている。

また、少し話が戻るが、協調学習に関しては、埼玉県が先進県であると思っている。ただ、本県の協調学習は広がりを見せているが、拡散傾向にあるように感じる。私がアクティブ・ラーニングで一番注目しているのは、広島県の『広島版「学びの変革」アクション・プラン』である。これは小中学校のパイロットスクールを30校選び、高校からも30校選び、そこに中核教員を1名ずつ置きながら研修を重ねていき、生徒に下ろしていくというものである。

先ほども申し上げたように、アクティブ・ラーニングにしても協調学習にしても、高校3年間だけではなかなか厳しい。広島では小中高同じプログラムで先生方が校種を超えて学び合っている。そういう動きでも出てこないか効果が出てこないのではないかと。本県でもパイロット校を作った方がいいのではないかと思う。現在は、何百人も自ら手を挙げる希望者制である。希望者も大切にしながら県教育委員会が音頭を取ってパイロット校を作るようなことをしていかないとまとまっていけない。協調学習はアクティブ・ラーニングの一つの手法であり、他のアクティブ・ラーニングの手法なども学びながらパイロット校を作っていくという段階に埼玉県は入っていると思う。

委員	<p>キャリア教育は学び続ける教育ではないかと思う。今の生徒の現状を見ていると、そこそこで満足してしまうので、学び続けることができない現状にある。特に私が勤務している高校は羽生、加須、行田に住む生徒が集まっているのだが、行動範囲がその地域に限られてしまっている。これだけインターネット等が浸透している時代であっても、買い物は「羽生のイオン」でいいやで終わっている。もっと日本や世界などグローバルな感覚を持ってもらいたい。そのためにももっと学び続ける意識を持ってもらいたい。</p>
委員	<p>魅力ある県立学校づくりの中で、子供たちが小学生、中学生、高校生となって、小学生からの目的・夢、中学校での夢を実現しようと思って、県立高校へ入学する。しかし途中で実現しないという実態が出てくるので、途中で方向転換ができるシステムを県立学校で作っていただけるといいのかなと思う。</p> <p>全ての学校に魅力があって、行ったら皆がそのまま学びきるということは難しい。転校できるシステムを作っていただければと思う。</p>
司会	<p>現在も事実上転校している生徒はいる。もっと自分の積極的な理由で転校できるようにしたいということか。</p>
委員	<p>転校とは汎用性の部分で重なるところがある話だが、20～30年前は今ある仕事の半分はなかった。例えばコンピュータ関係の仕事は20～30年前は一切なかった。これから10年後20年後には今ある仕事の半分はなくなるだろう。でも、やはりコンピュータ関係の仕事が生まれたように、何かが生まれて、きっと職種の数としては変わらず、何か新しいものが生まれるだろう。その時にどんな社会でも生きていけるようになるためには、今、お話のあった進路変更を自由にとということもあるし、もう一つは汎用性だと思う。</p> <p>汎用性とは、何かの科目を一生懸命やって、その科目に秀でるということではなくて、学び続けなければという意識が汎用性そのものだと思う。この意識さえあれば新しい社会でも、新しい時代でもいくらでも対応できると思う。学び続けなければという意識が足りないから、学校を中退してしまうのではないかと考えている。学び続けなければという意識がないので学校にしがみつけないのだと思う。だから、我々がこれから魅力ある県立学校づくりをしていくためには、学び続けなければという意識とそのノウハウを育てることが大事なのではないかと思う。</p> <p>そういうことができる県立学校は魅力あると思うが、それだけをやっては魅力が外に響いていかない。外に響いていかなくても魅力にならない。例えば、</p>

	<p>良いバッグを作ってその会社が製品に自負を持っていたとしても、そのバッグに「LV」という刻印がないとルイビトンなのだとすることが分からない。魅力ある県立学校づくりにはブランドが必要なのかなと思う。委員がおっしゃったように、まだ全国的なブランドではないが、自助・共助・公助というのは一つのブランドになると思う。魅力ある県立学校づくりというのは、何を「見える化」するのかというブランド戦略づくりであると思っている。</p> <p>世の中には既にこれは大事、こういうブランドは信頼できる、というものはある。例えば自己肯定感が大事だということであれば、それは「アドラーの心理学」でブランド化されている。人としての在り方生き方を言う時には、「コピーの七つの習慣」というブランドがある。自分の考えを人に伝えるには、「トヨタの改善」というやり方がある。自分自身の記憶・発想を広げていくのは「ブザンのマインドアップ」があるのではないとか、コミュニケーション能力を高めるために、発想を人に伝え、また人から発想を貰うということではアクティブ・ラーニング、ジグソー法があり、これからは知識基盤の社会だと言う時に、それを説明するには「ドラッカーの理論」という形で、それぞれブランドがあると思う。人はブランドで伝えられると、なるほど、と思うことが多い。</p> <p>魅力ある県立学校づくりの会議と言うのは、これから何をブランドにして県立学校を作ったらいいのかという観点で、自助・共助・公助というのも含めて、見える化を図った方が良くはないかと思う。</p>
司会	<p>ブランドと言うのは、各学校がそれぞれ考えて打ち出してということか。</p>
委員	<p>先ず県教育委員会で埼玉県の大きなブランドを考えて、次に各学校の個別のブランドがあるのだと思う。</p>
委員	<p>そこを2階建てにできると良いと思う。先ず、グローバル教育とかインクルーシブ教育とかキャリア教育とか、ここのエッセンスは埼玉の全ての学校で共通しているという部分を土台にする。その上で、例えばグローバル教育と言っても、外国人を受け入れた時のものと自分から世界に出ていく時のもので種類が違うから、この学校はグローバル教育の土台の中でも特にここに特化しているというのが見えるようにできると良いのではないか。</p> <p>中学3年生で不安になるのは、今は夢を持って強制されるが、そんなに簡単に夢なんて持てないよと思ったりすることだろう。また中3で夢を描けて、それが高校でフィットしていると思っても、前向きに生きていく中でゴールが色々変わっていくこともあるだろう。</p> <p>そう考えると、どこの学校に行っても保障されている、一人一人が大切にされ</p>

	<p>るとか、全力を尽くしてもなかなか終わらない学びの苦しみを味わうとか、そういう部分は共通していて、海外に行きたいけれどちょっと学校が違うと思った時には、お隣の受け入れてくれる学校に行けるような仕組みがあると安心できるのではないか。</p> <p>ただ、ここは議論のしどころであり、濃淡の付け方が難しいところだと思う。</p>
委員	<p>赤ちゃんは何でも自分ではできるのだという万能感を持って生まれてくる。それが成長とともにどんどんそぎ落とされてしまう。</p> <p>魅力ある県立学校づくりの観点の中に、万能感はそのまま生かせる、一生持ち続けることができるというところを入れていただけたらと思う。</p>
委員	<p>そうした考え方を原始思考と経験思考、そして最後に未来思考と言う形で打ち出せないかと考えていた。しかし、そういうことは全てを私達の教育で行うことはできない。生徒が教育から得たものをベースに自分達で獲得していくものだ。獲得していくということイコール企画力という言い方になると思うが、企画力を持てるとすべてのジャンルで生きていけると思うので、そういう力を県全体で付けていきたいと思う。</p>
司会	<p>いろいろと活発なご意見をいただき、ありがとうございました。本日は、時間が来たのでこれで会議を終了します。</p>